

# 靴の歴史散歩 ⑨4

皮革産業資料館 副館長 稲川 實

前号で、洋馬具と靴の専門店「三星商会」の開店記念写真をご覧いただいたが、明治末のあの写真からは、宿題の看板字「靴」以外にも、興味引かれるものがあるので、もうしばらくお付き合いをいただきたい。

この種の店頭写真は、明治時代に発行された「靴」や「鞆」の型録にも載っているのので、見比べることができる。

それらを見ると、決まって店先には何台かの自転車を並べ、それを誇示するような写真が多いから印象に残る。

主題ではないので深入りはしないが、座右の書『明治事物起原』（石井研堂）と『値段の風俗史』（週刊朝日編）があるので、それを頼りに自転車の事始めにも触れてみたい。

明治の自転車は、アメリカやイギリスからの輸入で、価格も200円から250円もしたそうである。当時、小学校の教師の初任給が、10円から13円だった時代である、その高額さも計れるかと思う。

現在のような「空気入りゴム輪自転車が開発されたのは、明治30年（1897）頃からで、国産化は明治40年（1907）頃だそうである。当初価格50円から150円と低価格だったので、普及にも拍車がかかり、大正期には国産車が主流になったという。草創期の珍しい広告があるので、それを紹介して区切りとしたい。

明治33年（1900）の日本橋三井呉服店（現・三越）の型録『流行』（第九号）に載っていた広告である。

「《自転車屋内練習》<sup>へいてん</sup>弊店屋内練習所にて、傳習料として金貳圓五十銭御佛込になれ

ば、<sup>おぼえ</sup>覚るまで（無期限）晴雨に<sup>かかわらず</sup>不拘何時でも便宜の時に御來習あれば、二三回、若しくは七八回にて、何人にも容易に<sup>なんびと</sup>覺へしむる方法にて、御教へ可<sup>もうすべく</sup>申候。弊店の練習所で<sup>すて</sup>覺へたる者、既に五千人以上に達せり。東京神田橋外 濱田自転車店」。

ついでにもう一つ。店先の砂利を敷いたでこぼこ道を眺めていて、「雨の日はさぞ難儀したろうな」と思ったら、急にゴム長靴のことが連想されてしまった。早速値段の風俗史を見たが、あいにく明治期の記録はなかった。頼みは明治の型録と探してみたら、幸いにも明治40年（1907）の大塚商店（現・大塚製靴株式会社）の『製造販賣品定價表』で、やっとゴム長靴との出会いがあった。（写真参照）

明治のゴム長靴は革靴と同じ値段、庶民には手の届かぬ高嶺の花であったことに、先ず驚いていただきたい。この項続く

